【経歴】

1948年　3月23日、大分県臼杵市に生まれる。
1969年　生井子雅氏（日展評議員）に師事
1970年　横浜国立大学教育学部美術科書道専攻6月卒業
1971年～1990年　神奈川県立逗子高等学校教諭（書道、国語）
1981年　晨風会受足
1990年～1998年　横浜国立大学・宇都宮大学非常勤講師
1990年　篆刻美術館設立に携わる。
1991年　篆刻美術館開館（同館協議会委員）
1992年　篆刻美術館篆刻講座開設
　　桃園印会受足
1997年　第1回晨風会展開催（横浜市桜木町ゴールデンギャラリー）
1998年　大東文化大学文学部教育学科専任講師（2000年書道学科配属）
2004年　大東文化大学助教授（2007年准教授に改称）
2004年「生井子雅展」－生誕100年記念－企画・解説
2005年　日展委嘱
2006年　第50回現代書道20人展に選抜出品
2008年　第40回日展新審査員
2009年　大東文化大学文学部書道学科教授（2010・11　学科主任）、日展会員
2010年　個展開催（大分県臼杵市中國陶瓷美術館）
　　「河野隆作品集－篆刻・書・画－」を出版
2012年　第44回日展審査員
2016年　個展開催（台湾・台北雅風堂）
　　「河野隆作品集 2016－篆刻・書・画－」を出版
2017年　大分県「豊の国かぼす特命大使」任命
　　[illegible]
　　7月[illegible]書道学科教授正式辞任（日展、[illegible]）
　　11月3日　肺ガンの為永眠
2018年　2月大東文化大学文学部書道学科大学院　卒業・修了作品制作展示[illegible]遺作展示
　　3月大東文化大学文学部書道学科名誉教授称号記授与
2019年　3月26日[illegible]19回晨風会展（[illegible]居堂画廊）
　　特別展[illegible]
　　9月28日[illegible]篆刻美術館[illegible]角美術館　「河野隆遺作展」開催
　　同展作品[illegible]

日本初の篆刻専門美術館の開館に[illegible]献身
日本を代表する篆刻[illegible]

河野　隆氏

（1948～2017）

河野隆氏業績

「主な受賞作品」

1976年　第8回日展　初入選　「我書意造本無法」
1981年　第43回　謙慎書道会展　梅花賞　「用筆如斬釘截鐵」
1984年　第1回読売書法展　読売新聞社賞　「任筆篤樸・聚墨成形」
1986年　第3回読売書法展　読売新聞社賞　「存精寓真」
1987年　第49回　謙慎書道会展　梅花賞　「不老樞」
1990年　第22回日展　特選　「文字祝」
2003年　第35回日展　特選　「攀鴻鵠」
2016年　改組新第3回日展　会員賞「四海兄弟」

「主な著書」

『方寸世界』－生井子華先生の篆刻－	石敬印社	1995年
『篆書の基礎学習』	晨風会出版局	1995年
『書－現代作家の技法　第5巻　篆書・隷書』	VHS出演	
	天来書院	1997年
『燕京一月之跡』	晨風会出版局	2001年
『古代文字年賀状』	可成屋	2003年
『プロが教える篆刻まるわかりハン[illegible]	可成屋	2005年
『書道テキスト』第10巻篆刻	二玄社	2008年
『平々凡々印譜』	晨風会出版局	2009年
『書－現代作家の技法　第5巻　篆書[illegible]	DVD	
	天来書院	2012年
『名印百話』	芸術新聞社	2013年
『自用印研究』	晨風会出版局	2014年

「篆刻を志したきっかけ」

神奈川県立翠嶺高等学校一年の時に、ひょんなことから書道部に入部しました。秋の一日、1,500人の生徒達が日展見学をするのが翠嶺高等学校の恒例になっていましたが、その時、淡墨の書の作品が多い中、陳列ケースに並んだ朱色の篆刻に目がとまりました。当時は、印影とともに印材も陳列されていたので、印面に残る刀痕が反転して朱白の妙な趣になるのが面白くて感銘を受け、かぶりついて見たものです。そして、日を改めて一人で出掛けて、半日、篆刻だけを見た記憶があります。

その後、横浜国大に進みましたが、三年生になる直前の春休みに、篆書・篆刻の集中講義があり、非常勤講師の当時日展で活躍されていた中村淳先生に眺った作品を激賞され、一発の光を見たような気がしました。

その頃は学生運動が盛んで全く授業もなく悶々としていた私は、卒業間近になって本格的に篆刻をやってみようと思い立ち、縦横な作風に心を惹かれていた生井子華先生に弟子入りすることになりました。

「篆刻への思い」

手のひらにのるほどの小さな方寸の世界に、大きな宇宙を表現できる[illegible]刻です。

例えば、白黒の書の作品の最後に、紅い小さな印を押すだけで作品[illegible]と引き締まるのは、やはりそれだけの存在感が篆刻にあるからです。

古代からの文字を調べ上げ、そこへ自分自身の感覚を溶け込ませ[illegible]成を練って印稿が出来上がります。

印材に写し取る「赤字」には繊細さ、一刀一刀と切り込む「彫り[illegible]」の鋭さ、そこには「気韻生動」のオーラが宿ることを願います。

初めて押す印の下から現れる作品を目にするときの高揚感、この深遠たる篆刻の世界を次の世代に伝えていくことが自分の天職だと思っています。

タイトル	出版社	出版年
遊びごころが光る古代文字年賀状	可成屋	2003
篆刻まるわかりハンドブック　プロが教える	可成屋、東京堂出版「発売」	2014
書道の基礎学習　基本部首五種	晨風会出版局	1995
平々凡々印譜　二社竹清精四十種、藤山陽宣精六種	晨風会出版局	2009
名印百話　篆刻美術館所蔵作品	芸術新聞社	2013
古印研究　篆刻鑑賞ガイド	二玄社出版局	2012

あらゆる疑問が氷解する篆刻虎の巻

篆刻初心者のみなさまへ。篆刻とは、印章のことです。篆刻の作品は、ほとんどが朱白の印です。朱白の印は、印面の凹凸が朱白の模様となって、印材の表面に現れます